

# みんなが豊かになる多文化共生保育をすすめるために

高茶屋日本語教室「がんばる会」

田中 レオニセ

## 1. はじめに

Boa tarde. Meu nome é Tanaka Leonice.

Eu sou um brasileiro.

Eu vim para o Japão há 24 anos.

Eu trabalhava em uma escola maternal por 8 anos até março.



この文章をみて、日本人たちが思う気持ちが、私が日本に来たときの気持ちです。外国につながる子どもが保育園に来たときもこういう気持ちです。そのことをまず分かってほしいです。

私の名前は田中レオニセです。私はブラジル人です。24年前に日本に来ました。今年の3月まで8年間保育園で通訳の仕事をしていました。

今、たくさんの国から、多くの外国の人たちが日本に来て暮らしていますが、最初に、どうしてブラジル人が日本にたくさん暮らしているのか、簡単に説明します。私の夫は日系ブラジル人の3世です。夫の祖父母は、もともとは日本に暮らしていた日本人で、過去の移民政策のなかでブラジルに移住しました。

## 出入国管理及び難民認定法

1990年の出入国管理及び難民認定法の改定(新法)により、日系2世の配偶者やその子(日系3世)には新たに「定住者」としての在留資格が与えられるようになりました。これにより、非日系の外国人であっても配偶者が日系人であれば「定住者」として在留資格が与えられ、「定住者」の在留資格があると「永住者」または「永住者の配偶者」と同様、単純労働を含めてあらゆる職種に合法的に就労することができるようになりました。

こうして1989年に14,528人であったブラジル人の外国人登録者数が翌90年には56,429人、91年には119,333人と増加することになりました。

※移民政策については、国立国会図書館のメインページの「電子展示会」内に「ブラジル移民の100年」というタイトルで詳しく掲載されています。

ブラジルに移住した人たちは、日本で、安定した仕事がなく、働いても十分な賃金を得られず、食べ物もなくて、すごく苦勞していた人たちが多かったそうです。夫の祖父母も、そうした状況のなかで、仕事をして満足な給料をもらって家族を養っていくために、安心できる生活を求めて、ブラジルに渡りました。夫は、その二人の孫ですから、日系3世ということになります。顔つきなどの見た目は日本人ですが、国籍はブラジルです。私が日本に来たころ（1992年）は、日系ブラジル人の人たちの間では、「1ヵ月で3,000ドルくらいもらえるから」とか言って、「日本にはいっぱい仕事があるから、みんな、日本に行きましょう」という感じでした。

## 「あきらめない」

私がこれまでの日本での暮らしの中で大切にしてきた言葉は「あきらめない」という言葉です。「負けない」と似ていると思う方もいるかもしれませんが、私の中では、「あきらめない」は「負けない」とはちょっと違うのです。「負けない」は、あきらめて負けそうになったときの言葉だと思うのです。私は、負けそうにならないように、どんなことがあっても「あきらめない」と自分に言い聞かせてきました。

## 2. 日本での子育てのなかで感じてきたこと

### ～言語、文化、習慣のちがい～

それではまず、私が日本に来たばかりの時のことを話します。私が日本に来たときは21歳で、すでに二人の子どもがいました。その二人には聴覚障害がありましたので、二人は津市にある県立聾学校に通っていました。ちがう国に来て、言葉もなにもかも分からないなかで、特別な学校に通わなければならなかったのも、とても大変でした。聾学校の幼稚部は、今はどうか分かりませんが、親も一緒に学校に行かなければいけませんでした。聾学校では、手話も覚えなければいけなかったです。でも、私は先生の言う日本語もわからないし、手話も分かりません。だから、先生が一生懸命話をしてくれても眠くなるだけでした。

私たち家族は、初め、鈴鹿市に住んでいました。当時の私は、運転免許証を持っていなかったのも、津市にある聾学校までバスや電車を乗り継いで行かなければいけません。私がブラジルで住んでいた街は小さかったので、電車も通っておらず、どこに行くのもだいたい歩きでした。バスもほとんど使うことはありませんでした。それで、日本に来て、電車やバスを使わなければいけないということで、とにかく大変でした。バスの中では、日本では当たり前のことかもしれませんが、子どもであっても静かにしなければいけないというようなマナーやルールに戸惑ったり、困ったりすることが多かったです。

日本語がまったく分からないなかで、何をどうすればいいかも分からずに、泣きそうになる毎日でした。でも、「全部するしかない」「がんばるしかない」と自分に言い聞かせ続けました。日本語を覚えるのは本当にすごく時間がかかりました。

言葉だけでなく、文化や習慣の違いに驚くことばかりでした。日本の文化や習慣は、この国で生まれ育った人には当たり前でも、私たちのように外国から来た者にとっては当たり前

ではありません。

その一つが子どもの服装などについてです。私は、寒いときには子どもに上着 5 枚とか、いっぱい着せていましたが、聾学校の先生は、「そんなにいっぱい着せたらだめ」と私に注意をしました。私は「なんでダメ?」「無理ですよ。寒いです」としか言えなかったです。日本は肌着というのがありますね。ブラジルにはそういうものはなかったです。ブラジルでは、T シャツを着て、その上にトレーナーとかを着るのがぶつうでした。だから、聾学校の先生たちに、「汗を吸うから衛生的だ」とか「保温によい」と言われても、全然理解できませんでした。先生たちは、私に「肌着を着せたら温かいから、そんなに何枚も着せなくていいですよ」と教えてくれましたが、私には、まずそれを売っているところが分かりませんでした。



身に付けるものでは、靴に関して文化の違いを特に感じました。日本では、家に入るとき、靴は脱ぎますよね。ブラジルではそうではありません。だから、家では靴を脱がないといけないことに、すごくびっくりしました。それで、私が思ったことは、日本では靴より靴下を選ぶことが大事だなということです。いい靴を履いていても、靴下をあまり考えずに履いていたら、どこかに行って靴を脱いだら、靴下が丸見えですよ。だから、靴下を買うときによく考えるようになりました。靴を脱いで「あっ、こんな靴下?」って他の人に見えるじゃないですか。

他には、香水を選ぶときも、これは日本人にとっては、においが強いかなとか考えながら、買うようにしました。においのきつい香水を使ったらダメとか、日本人に気を遣って考えることが、私にはすごいプレッシャーでした。私たちはいいにおいと思っているけど、日本人は、それを「くさい」とか言うので、すごく気を遣いました。私は、汗のにおいのほうがよっぽどくさいと思います。だから、「汗のにおいより香水のほうがいいのにな」と思います。どうして香水のにおいがくさいのか理解できませんでした。子どもたちも、香水をつけて登園する子もいると思います。ブラジルもフィリピンもペルーやボリビアでも、よくあることです。これらの国はスペインの文化圏なので、文化がよく似ています。まったく日本とは違いますよね。

三人目の子どもは、地域の保育園に通いましたが、聾学校の幼稚部のときよりも、言語や文化のちがいを越えて共生する大変さを実感しました。まず、保育園から持ってくるように言われる持ち物が分からなくて、そのころは通訳もいなかったのでも、すごく困りました。先生たちが漢字をひらがなにしてくれても、ひらがなが分からないので、もらう手紙に出てくる言葉を、一つずつを調べるしかなかったです。先生たちもいろいろ考えてくれて、「アルファベットであれば」と、ローマ字でルビを書き加えてくれたときもありましたが、ローマ字も日本語ですよ。だから、漢字であってもひらがなであってもローマ字であっても、日本語は、私にはどれも分かりませんでした。今は辞書も立派なものがいっぱいありますが、そのころはほとんどなかったから、見つけられない言葉がいっぱいありました。それに、日本語は言い回しのなかで難しい言葉がたくさんありました。同じ言葉でも意味がちがう言葉があったり、間に入る言葉などで、辞書でも見つけられない言葉があったりしました。だから、意味を理解するのにすごく苦労しました。

保育園に入るときに、「えほんぶくろ（絵本袋）」を用意しないといけないということがあって、今だったら、できたものが売ってたりしますが、25年くらい前は、家の人を作る

ものでした。私は、ブラジルでミシンの使い方を習ったり、実際に使ったりすることがなかったため、裁縫は一切できませんでした。だから、生地を売っているところで5000円くらい払って作ってもらいました。他に、「きゅうしょくぶくろ（給食袋）」とか、いろんな袋があって、「それは何?」「前の袋と何が違うの?」という感じでした。説明してもらっても、よく分からないものがたくさんありました。どこに売っているかも分からない。「バスタオル」と言われても、「バスタオルって何?」、「ふろしき」「しきもの」などは、本当に「???」でした。

また、上の子どもたちに障がいがあったので病院に行くことも多かったのですが、病院に行って先生の説明を聞いても全然分からないことばかりでした。「今日、〇〇の検査がある」と言われて、病院に連れて行くのですが、どんな検査なのか分かりません。それで、子どもが診察室に入っていくと、部屋から聞こえてくる子どもの泣き声に「なんで泣いているの?」「何をしているの?」と不安になるだけでした。私の友だちも同じことを言います。どうして子どもが泣いているか分からないから不安しかないんです。血液検査だけでもすごくつらかったです。

## 忘れられない顔

こんなふうに、言葉や文化の違いにすごく苦労してきた二十数年間の日本での生活ですが、そのなかで、私にはずっと忘れられないことがあります。

言葉もほとんど分からないころ、降りるバス停を記してもらった紙だけを持って、子どもを聾学校に連れて行くためにバスに乗ったときに、降りるバス停を乗り過ごしてしまったことがありました。私はどうしたらいいか分からずに、終点まで乗り続けるしかありませんでした。そうしたら、運転手さんが私たち親子のところに来てくれました。私は、降りるバス停を記してもらってあるメモをみせることしかできませんでした。「ここに行きたい」とも言うことができません。ただ指で文字を指すだけです。すると、その運転手さんも、指で指して、ここに座るように伝えてくれました。それで、運転手さんの後ろの席に座って、降りるバス停のところで降りるように教えてくれて、無事に降りることができました。このバスの運転手さんとは、言葉1つのやりとりもありませんでした。でも、私は、今もその運転手さんの顔を忘れることができません。その人の優しさが忘れられないのです。

逆に、ずっと忘れられない、すごく嫌なこともありました。買い物に行ったとき、レジをして、買い物を袋に入れるところで、隣の人が買い忘れた物を思い出して、また、買い物にもどったんです。そのとき、その人は、遠くにいた友だちに「私の買い物、見ていてね」と頼んだんです。そのとき、その人は、その言葉に続けて、「外人がいるからあぶない」と言いました。私は、一切人の物を触ったこともないし、盗むなんてことをするわけがないのに、「なんでそんなこと、言われないうけないの」「何?外人って?」と思いました。それが今もすごく嫌だったこととして覚えています。そのときは、私がその人に怒ったら、私が悪い人になってしまう、だから、何も言わず、すぐスーパーから出て、駐車場のところで、悔しくて泣くしかありませんでした。

私はみなさんに運転手さんのような、優しい人、人を助けられる人になってほしいです。日本語が分からないと本当に苦労します。言葉が分からないだけでも大変だけど、文化を理解することはもっと難しい。親は仕事に忙しくて、日本語を勉強する時間があまりない人も多いです。だから、先生たちが言う通りにできない外国籍の保護者の人たちがたくさんいると思うけど、それは「できないから悪い」ということではなく、「できない」難しさを分かっていると思います。周りの人の理解と応援が必要です。



### 3. 保育園に勤めて感じたこと

#### ～子どもや保護者の思い～

今からは、みなさんに外国につながる子どもたちや保護者の人たちを理解し、応援してもらうために、私が保育園に勤めて感じたことを話します。

子どもたちは、保育園で友だちといっしょに過ごしているなかで、すぐに日本語を覚えていきます。日本語を覚えて、日本の子どもたちと同じように日常生活ができれば大丈夫だと思っている先生もいっぱいいるように思います。私は、保育士さんたちが「この子は、もう日本語が分かるから大丈夫」と話しているのをよく聞いたことがありますが、それは大間違いです。なぜかというと、日本の子どもと同じように指示通りに行動や活動ができていたとしても、それは日本の子どものまねをしているだけで、先生の言葉を理解して行動しているわけではないということがあるからです。また、日本語を話すことができても、学校で習う勉強は全然できない外国の子どもたちがたくさんいます。保育園の時、「この子は日本語がすごく上手だった」と言っても、学校に行ったら、日本語で日常会話ができるかどうかの問題ではないです。日本語を話すことができても、勉強となると日常生活では使っていない言葉が出てきて、学習内容を理解することはやはり難しいのです。

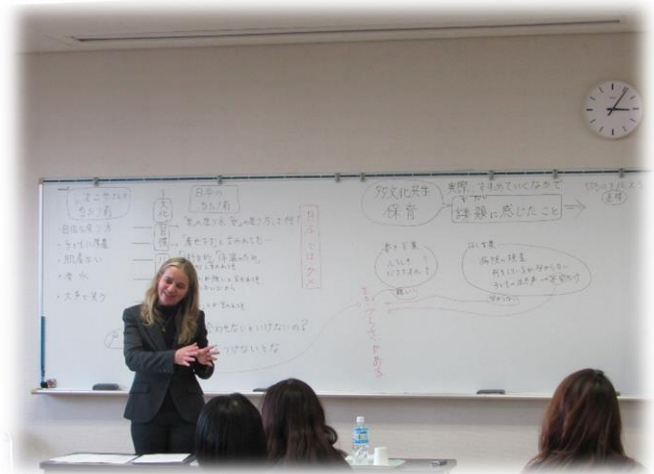
しかも、外国の子どもたちは日本の保育園のなかで日本語とともに日本の文化を覚えてきますが、家に帰ったら、文化や習慣は保育園とは全部違います。子どもたちは2つの文化のなかで生活しています。家で使われる言語は、親の国の言葉であることが多いので、保育園で自分の国の言葉を使わず日本語で話している子どもの場合、特に、大きなストレスをためていると思います。

また、外国籍の子どもたちのなかには、準備しなければならない持ち物を忘れがちな子どもたちが少なからずいると思います。遠足など特別な行事の時には、先生たちは、子どもの持ち物をお便りで伝えたりしますよね。でも、書いてあることが分からないということがありますから、伝えたいことが伝わっていないということがよくあります。母語スタッフがいる保育園で、通訳をして伝えても分からないことがあります。なぜ、分からないのかと言うと、私も通訳の仕事をしていて困ったのは、例えば、「しきもの」「べんとうばこ（弁当箱）」とか、私たちが使わないものをどう訳せばよいのかということや訳するポルトガル語がないということでした。日本で使われている物の固有名詞には、説明が難しいものがたくさんあります。今は100円でもいろんなものが買えるようになって、本当に楽になったけど、もうちょっと前は、どこのお店に行けば、その物が売っているのか、分からないことが多かったです。でも、子どもたちは、日本の友だちが持っているすごくかわいい物を見ると、家で「お母さん、〇〇ちゃんがすごいかわいいお弁当箱を持っていたよ」と話をします。子どもからそういう話を聞いて、お母さんが保育園に来て、「〇〇ちゃんのお弁当箱ってどんなの？」「どこに売っているの？」と聞いてくることもありました。

お弁当の中に入れる物についても、私自身、親として子どものお弁当を詰める際に、すごく苦労しました。これも日本の文化なのかもしれませんが、日本人の子どもたちが持たせてもらっているお弁当は、キャラ弁とかいうのもあって、すごくかわいいですね。あんなお弁当を私は作ってあげたことがありませんでした。だから、子どもにかわいそうな思いをさせたのではないかと思います。家に帰ってきて、子どもが自分のお弁当を「恥ずかしかった」とか「〇〇ちゃんのお弁当みたいな、かわいいお弁当が良かった」とか、「△△ちゃんのお弁当には、いっぱいおいしそうなものが入っていた」とか言うと、お母さんたちもかわいそう

です。子どもからお弁当の説明を聞いても、どうやったら、そんなかわいいお弁当が作れるのか、分からないでいます。子どものためにいろいろしてあげたいという気持ちは外国のお母さんたちも、当然のことですが、もっているということです。でも、どうしてあげればいいのか分からないのです。だから、持ち物などは、実物をもって見せることが外国人の保護者の人たちには、いちばん分かりやすいです。遠足などの時には、リュックサックを持って、「これとこれとこれが必要ですよ」というふうに実際に見せて説明したり、絵に描いて説明したりすれば、理解できると思います。文字や言葉よりも、実際の物をみせるということはずごく大事なことです。

保育園には、「おもちゃを持ってきたらダメ」「ピアスを使ってはダメ」「マニキュアを塗ってはダメ」など、たくさんルールがあります。私は、通訳として外国人のお母さんたちに、どうしてダメかを説明したことがあります。みなさんは、保護者の人たちに理由を付けて説明していますか？ピアスは、していることでその子自身や周りの人がケガをする可能性があるからダメなんですよ。外したピアスを食べてしまうということも考えられます。こういう約束事やルールも、一つひとつ、きちんと説明すれば理解できると思いますが、「とにかくダメ」ということがたくさんあるのではないのでしょうか。「日本では、これはダメ」と言ってしまういませんか。それでは納得できません。「日本ではこうだから」ではなく、理由が言えないようなルールであっても「日本で生活するうえでは、こちらのほうが生活しやすいよ」とか、本人のためにそのことを知っておいてほしいということを伝えれば、分かり合えると思います。相手の文化や習慣の違いを尊重しながら、きちんと理由や伝えたい意図を説明することが大切だと思います。



外国人のお母さんが保育園に車で来たとき、駐車禁止のところに車を停めて、トラブルになったことがありました。園長先生が、そのお母さんに「ここには停めないでください」と言いに行くと、そのお母さんは怒って「さっきまで、日本人で停めている人がいたじゃないですか」「なぜ、停めてはいけないのですか」「外国人だからですか」「それは差別です」と言いました。確かに、そのとき、日本人のお母さんで、間違っ停めていた人がいたんです。そんなふう停めていた人がいたことを園長先生は知りませんでした。でも、外国人のお母さんは、日本人が車を停めていたことと、その人に対して誰も何も言わなかったことに、なぜ私たちだけがダメなのかという思いを持ったんだと思います。外国の人たちは、こうした思いになりがちです。このことから、ぜひ、みなさんには、外国の人たちがどうしてそんな思い方になるのか、ということを考えてほしいと思います。

外国人のお母さんたちは、先生たちが、日本人の保護者と話をしている場面をよく見えています。保育園に勤めているとき、外国の人たちから、「先生たちは、なぜ日本人と話すときは嬉しそうで、私たちと話すときは表情が違うのか」と聞くことがありました。このように、外国の人たちのなかには、笑顔で話す先生たちの表情を見て、自分たちと話すときは全然違うというように感じている人たちもいます。「私たちには、子どものいい話は何も伝えてくれないのに、注意するときや何か悪いことがあったときだけ、通訳を呼んで、丁寧に伝えようとする」ということをよく聞かされました。だから、通訳がいてもいなくても、やっぱり

先生たちが、お母さんに、子どもたちの保育園でのよかった姿や素敵な場面など「このことをどうしても届けたい」という思いをもって、きちんと話をすることが大事だと思います。

加えて、話の仕方について言うなら、外国人のお母さんと話すときは、要点を端的に伝えるほうがよいと思います。日本の人は、伝えたいことをいろいろと詳しく説明しながら最後に言うことが多いように感じています。私たちは、パッと要点を言ってくれないと、いろいろ聞いているうちに、出来事を大きく捉えてしまったり、心配なことを想像してしまったりすることがあります。だから、話す用件の要点を端的に伝えた方がいいと思います。例えば、子どもが散歩でこけて膝をすりむいた、ということを伝えるのであれば、「今日、散歩してこけて、ひざをすりむいた」でいいです。「あの、お母さん。ごめんね。今日ね、〇〇〇で、それで、△△があって、それで、こけたんだけど、そのあと……」というようにすごく長くなると、「もう早く言って。何があったの？」というふうに思ってしまう。通訳をする私も、「もっと短く言って。何が言いたいのか、わからないよ」と思ってしまうことがよくありました。もっと詳しく知りたいことがあれば、お母さんがちゃんとあとから聞くとするので、そうしたら、さらに説明をすればいいと思います。

私は保育園に勤めて、先生たちの気持ちはすごくよく分かりますし、外国のお母さんたちの気もちもよく分かります。子どもの持ち物のことで、ブラジル人のお母さんが私の所に相談に来たことがありました。子どもが忘れ物をすると、先生は子どもをすごく注意するということでした。お母さんはそれをすごく嫌がっていました。「4歳の子どもがそんなにも責任をもたなければいけないのか」ということでした。「まだ早いんじゃないのか」と。私もそのお母さんと同じ感覚で、4歳や5歳でその子に責任があるみたいに怒られたらかわいそうだなと思います。「大きくなったらいっぱい自分の責任をもたないといけないんだから、そのころくらい、まだまだいいじゃない」と思います。でも、そのお母さんに、私は「日本の保育園は、その子に責任を負わせるということではなく、その子を自立させることを大事にしているので、家に帰ってすぐに『お母さん、明日、〇〇が必要だから』と言えるような子どもを育てようと、先生たちはがんばってくれているんですよ」と説明をしました。私は、日本の保育園に勤めたから、そうしたことが理解できますが、お母さんたちには、分からないことです。通訳をしていた私は、言葉を翻訳することだけでなく、日本の文化や保育・教育のことなど、さまざまなことを教えなければいけないと思って、やってきました。

子どもたちの「自立」ということに関して言うと、私たちの国のお母さんたちのなかには、子どもを5歳になってもまだ「ベビー」と呼んでいるお母さんもいます。私たちにとっては、それは当たり前のことでした。日本では、「1歳くらいで、もうほ乳瓶はダメ」とかを聞いたときは、本当にびっくりしました。私の子どもは3歳半くらいまでほ乳瓶を使っていたが、それでも早いくらいです。5歳、6歳くらいまでほ乳瓶を使っても、全然問題ではないという認識でいます。でも、日本では、そんなことは信じられない、といった感じで、そのギャップにお母さんたちが苦勞するということがあります。こうしたことは、ブラジル人だけかなと思っていましたが、この前レストランに行ったら、4歳か5歳くらいの子どもを連れたフィリピンのお母さんが、子どもにごはんを食べさせているところをみました。お母さんは、その子どもたちをまだ赤ちゃんのように、すごく大事に関わっているのです。保育園の先生たちがみたら、すごくびっくりすることだと思いますが、私はその親子の姿をみて、これがフィリピンの文化なのだなと思いました。日本の教育では、子どもたちを自立に向かわせるのがすごく早いと感じますが、逆に、中学生くらいの段階になると遅いなと思います。ブラジルは日本とは反対です。6歳くらいまではまだまだ赤ちゃんですが、14歳、15歳になったら、もう子どもじゃないです。それがいいか悪いかではなくて、そこに文化の違いがあるということだけなのです。

## がんばらないと！

保育園で仕事をしていた、私は先生たちとともに悩み泣くこともありましたが、お母さんと一緒に泣いているときもありました。通訳として、先生たちと外国の保護者の人たちをつなぐ役割を担っているという自覚もありながら、うまくできない自分に悔しくて、家に帰って一人で泣いてしまうこともありました。先生たちの考え方もお母さんの考え方も、お互いにそれぞれの文化にとらわれていて、私が間に入ろうとしても、どうすることもできないことに直面することが何度もありました。でも、先生たちと保護者の人たちの関係が築けずにいることで、いちばんかわいそうなのは誰でしょう？子どもたちの感性を豊かに育てる多文化共生保育をすすめていきたいにもかかわらず、おとなばかりの問題になってしまって、置き去りにされてしまっている子どもたちがいちばんかわいそうです。

保護者の人に保育園に必要な持ち物を準備してもらうことが難しいということが、子どもにとってどんな課題となっているのか、忘れ物をするなどで、その子どもがどのくらい傷ついているのか、ということを考える必要があると思います。子どもが、そのことですごく落ち込んだり、「お母さん、〇〇を入れてくれなかった」「お母さんが△△を忘れた」と思ううちに、その子どもは、だんだんお母さんのことを嫌いになっていってしまいますよね。私も自分が保育園に勤めて、こうしたことをすごく考えるようになりました。だから、子どもたちが、そういう思いにならないように、私たちおとなががんばらないとダメだと思いますし、自分にできることをしていきたいと思います。

## 4. 多文化共生保育をすすめるために ～ちがいを越えて～

### (1) 保育・教育に願うこと

私の子どもが4年生の時に、先生が家庭訪問に来て、私は、大学に行かせたいということをお話しました。そうしたら、先生が「えっ！大学に行くつもり？」「だったら、もっと勉強教えないといけない」と言いました。私は、この言葉を聞いて、「今まで何しとったん？」と思いましたよ。「外国人だから、別に学校に来たらいいだけだと思っていたのかな」と感じました。

私は、保育・教育の目標は、将来を考えて、社会人になるための力をつけるということだと思

っています。外国籍の子どもたちの場合、突然自分の国に帰ってしまう子もいます。そうすると、せっかく日本語や日本の文化を教えたのに、という思いになるかもしれません。その先生たちの気持ちはすごく分かります。ですが、やはり目の前に子どもがいる間は、日本でこの子どもたちがどう生きていくのかということだけを考えてほしいと思います。

そのために、先生たちには、まず、外国の文化や習慣について知ってほしいです。それがすごく大事だと思います。私はブラジルとよく似ているとはいえ、フィリピンのことはあまり分かっていません。だから、私はフィリピンの文化もいろいろ勉強しました。中国についてもそうです。ブラジル人はよく大きな声で話すとされますが、私が出会った中国人はも





っと大きな声で話していました。これも、もしかすると中国の文化なのかな、と思い、中国の文化について調べたり、いろんな人から話を聞いて、勉強したりしました。中国は、家族の人数が多いということが大きな話し声につながっているということもあるそうです。大きな声で話さないと、周りの人に聞こえないというのがあるみたいです。

それぞれの国の文化には、全部、意味があるんですね。日本人は、周りに迷惑をかけるようなことをすごく気にしますよね。こうした部分の日本人の文化はとても素晴らしいと感じます。でも、私はなかなか日本人と同じようにはできないです。

外国の子どもたちにとっても、やはり文化の違いに課題を感じる人が多いと思います。日本に暮らしている以上、日本の文化に合わせなければいけない、日本に住んでいるから日本語を覚えなさいといけなさい、自分の国の言葉を使ったらダメとか、そう考える人もいます。でも、その考えは、子どもにとってもかわいそうだと思います。私自身、日本で暮らしながら、文化、習慣、ルール、マナー、日本のいろんなことを知り、なるべく合わせようと努力してきました。でも、「これらはそれぞれどう違うのか」「どうしても合わせなければいけないのか」と疑問に思うこともありました。法律はその国で絶対守らなさいといけなさいけど、その他のことは、どこまで日本人と同じようにしなければいけないか、今も、迷ったり悩んだりすることがあり、難しいなと感じています。



しかし、私は日本での生活が長くなり、どこか日本人らしくなってきた自分に気づくことがあって、それは、自分の国の文化や習慣を全部押さえているような感じもしていて、こういう思いを、外国の子どもたちにはさせたくないと思います。子どもたちには自分の国の文化にも誇りをもって育ててほしいので、何もかも自分の国の文化は捨てて、日本の文化に合わせて日本人らしく過ごすようなことは、絶対におかしいと思っています。だから、日本の文化も自分の国の文化も、それぞれが尊重されるようにしていきたいと思いますし、うまくいかないこともあると思いますが、周りのおとなががんばれば、少しずつでもそれを実現していくことができるのではないかなと思っています。

多文化共生は、まずは違う文化と出会い、その違いを知ることが大事だと思います。そんなに難しいことではないと思います。ブラジルの子どもがきてくれるんだったら、「ブラジルの文化はどんなのかな」と、興味をもって、少しでも知ることから始めてほしいです。フィリピンでも、どこの国であっても、「どんな子がくるかな」「その子の国の文化を知りたいな」と思って、そして、その子のことやその子の文化が少しでも分かったら全然違うと思います。

## (2) 自分たちにできることを

職員会議で「来月から新しいお友達が保育園に来ます。その子は外国籍の子どもです」と伝えられたとき、すぐに「何歳児?」「その子を担当するのは誰?」と思ったことはありませんか?先生たちが大変だという気持ちも分かりますが、その質問を聞くたびに、私は心が痛みました。子どもはみんな、かわいいですよ。その子が日本語を話せるかどうかではなく、その子の国の文化を知ることが大事じゃないかなと思います。

最近、すごく気になっていることは、小学校に進学後に、特別支援学級に在籍する外国人が増えているということです。絵本を読んでいるときに走り回ったり、先生の指示を聞かずに勝手な行動をしたりする外国の子どもたちが、園内で「気になる子」とされ、「発達障害」によるものとみなされてしまうことがあるのではないのでしょうか。私は、いろんな外国人のお母さんから相談をされることもありますが、日本語ができないという言葉の壁が、その子

どもの発達上の問題に変えられてしまっていないかと心配しています。学校の先生たちから「検査して判断しているから大丈夫」と聞くけど、「大丈夫って、どういうこと？」と思います。発達検査についても、外国人の子どもたちにはすごく難しい面があると思っています。検査に通訳が入っても、その通訳者の訳がきちんとできているかどうかは確かめることができません。通訳者自身の考えもあるし、通訳者の解釈が入ってしまうことも考えられます。そのため、検査がきちんとできていないこともあると思います。保育園に勤めているとき、よく動き回って、全然落ち着いて活動することができずに、「あの子はきっと何かあるな」と思われていた子どもが何人かいましたが、日本語でコミュニケーションがとれるようになり、先生の言うことや友だちの言うことが分かるようになったら、みんなと同じように園生活を過ごすことができるようになりました。小学校に入学後も、特別な支援を必要とすることはありませんでした。

また、反対に、日本の子どもたちも、小さいうちから違う国の文化や言語に触れていけばいいんじゃないかなと思います。一生懸命覚えるということではなく、遊びながら「おはよう」とか「ありがとう」などのコミュニケーションの言葉を知ったり、外国の歌を聴いたりして、他文化を体感していくことが大事だと思います。

それと、外国人の保護者の人たちへの対応としてですが、お母さんたちは、先生の言うことを分かっていないのに「はいはい、わかりました。大丈夫」と笑顔で返事してしまうことがよくあります。でも、内容は全然分かっていないですよ。それで、そのまま帰ろうとするから、私はお母さんたちに「わからないことはわからないって言わないとダメだよ」と言ってきました。私たち通訳がいると、いろいろ相談をしてくれます。私は、そんなとき、「なんで先生たちに相談しないのか」と言います。先生たちに対しては、すごく遠慮するみたいです。ですから、先生たちの方からも、相手に遠慮させないように、少しだけがんばって、朝のあいさつを相手の国の人の言葉で言うなどすれば、お母さんたちとの関係はずいぶん変わってくると思います。

ポルトガル語の「おはようございます」が分かる人はいますか？「Bom dia」と言います。スペイン語の「おはよう」は分かりますか？「Buenos días」と言います。それであいさつをするだけで、全然違うと思います。「おはようございます」とか「ありがとうございます」とか「さようなら」とか、それだけの言葉だけでも、お母さん達はすごく嬉しいと思います。「先生、すごい。勉強してくれたんですね」と言います。私は、自分が勤めた保育園で、先生たちからポルトガル語であいさつしてもらったとき、本当に涙が出ました。すごく嬉しかったです。時間を使って、言葉を調べてくれたことだけで嬉しいのです。

### **(3) 私にできることを ～高茶屋日本語教室「がんばる会」～**

私は今、高茶屋市民センターで日本語教室をやっています。10年くらい前のことですが、この地域に暮らすブラジル人が多くて、生活上のいろいろな困難がありました。そのなかに、日本に来て間もない人ですごく困っている人がいて、私の友だちがそのことを教えてくれました。そのときに、前からすでに日本で暮らしていた私たち数人で「日本語教室をやしましょう」ということになりました。私もそんなに日本語が上手ではなかったし、「無理じゃないか」という意見もありましたが、「少しでも日本語が分かれば今よりも暮らしやすくなるんじゃないか」と話し合って、私自身も日本に来たばかりのころにすごく苦労したことを思い出して、いっしょにやりましょうということになりました。本当に最初は、日本語の単語だけを教えるくらいで始めました。そこから、だんだん、ボランティアの人たちなども入ってきてくれて、現在では、日本人が日本語を教えて、私はそのサポートのような役割で、通

訳をしたり、その人たちの悩みや困っていることを聞いたりしています。毎週土曜日、午後6時30分からやっています。どんなに忙しくても、用事あっても、その時間はきちんととるようにしています。どうしてかというと、私も苦労したときに周りの人に助けてもらったので、今の自分にできることをやって、少しでも困っている人の助けになりたい、いっしょにがんばりたいと思うからです。がんばる会では、日本語だけじゃなくて、日本の文化や習慣などのことも勉強し合っています。最近は、がんばる会にベトナムの人やフィリピンの人、中国の人、インドネシアの人、ボリビアの人なども来てくれていますので、そういう人たちと日本の文化について学習しています。

共に生きるということは、お互いに相手のことを理解し合い、尊重することだと思っています。私は、多様な人たちが豊かに共生できる地域や社会をつくるために、あきらめずにがんばろうと思います。がんばるしかないです。私は、今の私にできることを行動に移したいと考えています。

